

深見夫人の死

岡本綺堂

青空文庫

一

実業家深見家の夫人多代子が一月下旬のある夜に、熱海の海岸から投身自殺を遂げたという新聞記事が世間を騒がした。

多代子はことし三十七歳であるが、実際の年よりも余ほど若くみえるといわれるほどの美しい婦人で、種々の婦人事業や貧民救済事業にもほとんど献身的に働いていることは何^な人も知^{んびと}っている。その主人公の深見氏もまた実業界において稀に見るの人格者として知られていて、財産もあり、男女二人の子供もあり、家庭もきわめて円満である。彼女になんの不足があつて、あるいは又なんの事情があつて、突然にかかる横死^{おうし}を遂げたのか、それが一種不可解の謎として世間をおどろかしたのであつた。したがつて、それに就いて種々の臆説が伝えられたが、いずれも文字通りの臆説であつて、ほとんど信をおくに足るようなものはなかつた。自殺と見せかけて、実は他殺ではないかという疑いもあつたが、前後の状況に因^よつて、それが他殺でないことだけは確かめられた。

その新聞記事があらわれてから半月あまりの後に、わたしは某所で西島君に逢つた。彼

は若いときから某物産会社の門司支店や大連支店に勤めていて、震災以後東京へ帰って来たのである。その西島君が今度の深見夫人の一件について、こんな怪談めいたことを話した。

あれは日露戦争の前年と覚えている。その頃わたしは門司支店に勤めていて、八月下旬の暑い日の午前に、神戸行きの上り列車に乗っていた。社用でゆうべは広島に一泊して、きようは早朝に広島駅を出発したのである。ことわって置くが、その頃のわたしはまだ学校を出たばかりの新参者で、二等のお客さまとして堂々と旅行する程の資格をあたえられず、三等列車に乗込んでいたのであった。

鉄道がまだ国有にならない時代で、神戸―下関間は山陽鉄道会社の経営に属していた。

この鉄道は乗客の待遇に最も注意を払っているというのををもって知られていたもので、三等室でも決して乗り心は悪くない。殊に三十五銭の上等弁当のごときは、我れわれのような学生あがりの安月給取りには贅沢過ぎるほどの副食物をもつて満たされているので、わたしはこの鉄道に乗って往来すること、上等弁当を買って食うのを一つの楽しみにしている位であった。そういうわけであるから、三等のお客さまたるをもって満足して、やが

て旨い弁当が食えることを期待しながら揺られてゆくと、ゆうべ遅く寝たのと今日の暑さ
とで、なんだか薄ら眠くなつて来た。

わたしは我れ知らずに小一時間も眠つたらしい。なにか騒がしいような人声におどろか
されて眼をさますと、わたしの車内には一つの事件が出来^{しゅつたい}来ていた。車掌が一人の乗
客を捉えて何か談判しているのである。他の乗客もみな其の方に眼をあつめていた。中
には起^たちあがつて覗^{のぞ}いているのもあつた。女客などは蒼い顔をして身をすくめていた。

唯ならぬ車内の様子にいいよ驚かされて、だんだんその子細^{しさい}を聞きただすと、列車は
もうFの駅に近づいたので、三、四人の乗客はそろそろと下車の支度をはじめて、その一
人が頭の上の網棚から自分の荷物をおろそうとする時に、汽車にゆられて手はずして、
半分おろしかけていた風呂敷包みをほうり出してしまった。幸いに他の乗客にはあたらな
かつたが、その風呂敷包みが床にどざりと投げ落されたはずみに、結び目がゆるんだとみ
えて、中の品物がころげ出した。それは何かの缶詰が三つ四つと、大きい唐蜀黍^{とうもろこし}五、六
本であつた。単にそれだけならば別に子細もないのであるが、その唐蜀黍のあいだから一
匹の青い蛇が鎌首^{かまくび}をもたげたので、他の乗客はおどろいて飛びあがつた。女たちは悲鳴
をあげて騒いだ。

その騒ぎに車掌もかけ付けて、汽車中へ生き物——殊に蛇などを持ち込んで来た、かの乗客に対して詮議せんぎをはじめたのである。その乗客が農家の人であることは其の服装をみて大抵想像された。彼は四十五、六歳の、いかにも質朴らしい男で、日に焼けている頬ほをいよいよ赭あからめながら、この不慮の出来事に就いて自分はまったくなんにも知らないどもと唸りながらに釈明した。

「乗車券をみせて下さい。」と、車掌は奪うように彼の手から切符を受取って見た。「Kの駅から乗ったのですね。」

「はい。」と、男はひどく恐縮したような態度で答えた。

彼はKの町の近在に住む者で、Fの町から一里ほど距はなれたところに親戚があるので、自分の畑から唐蜀黍を取り、Kの町へ出て来て蟹かにの缶詰を買かい、それらを土産にしてこれから親戚をたずねようとするのであった。勿論、蛇などを持って来る筈はずがない。こんな小さな蛇は親戚の村にもたくさんに棲んでいると、彼は言った。

農村の者が農村の親戚を訪問するのに、こんな蛇などをわざわざ手みやげに持って行く筈がない。一尺ぐらいに過ぎない蛇であるから、おそらくその唐蜀黍と一緒にまぎれ込んで来たものであろうとは、誰にも想像されるところである。殊に飛んでもない人騒がせを

したことを、非常に恐縮しているらしい彼のおとなしい態度が諸人の感情をやわらげた。

「そうすると、畑からまぎれ込んだのを、あなたも知らなかったのですね。では、まあ、仕方がない。早く外へ捨てて下さい。」

「はい、はい。」と、男はあやまるように頭を下げた。

「早くして下さい。もう直ぐに停車場へ着きますから。」と、車掌は催促した。

男は農家の人だけに、こんな蛇をなんとも思っていないらしく、無雑作むざうさにその尾をつかんで窓の外へ投げ出すと、車内の人々は安心したように息をついた。

「どうもまことに相済みません。」と、男は人々にむかって又もや頭を下げた。「どうしてもあんな物が這はい込んだのか、実に不思議でございます。これからは気をつけます。どうかまあ御勘弁を願います。」

言ううちに、列車はもうFの駅に着いたので、男は又くり返して詫びながら早々に降りてゆくと、それと入れちがいに、この車内へ乗込んで来たのは学生らしい若い男と娘の二人連れで、わたしの向うの空席に腰をおろした。わたしはここで例の弁当を買おうかと思つたが、岡山駅まで待つことにしていると、列車はやがてゆるぎ出した。

「いや、どうも飛んだお茶番でしたね。」と、東京の商人らしい乗客の一人が笑いながら

言つた。

「蛇となると、小さいのでも気味の好くないもんですよ。」と、隣りにいる一人が答えた。「まったくあの風呂敷包みがころげ落ちて、唐蜀黍のあいだから蛇の出た時にはぞつとしました。」と、その前にいる女も言つた。

蛇の噂うわさが一時いきり車内を賑わした。あの男は實際なんにも知らないらしい。あの男があんまり恐れ入つてあやまるので、しまいには氣の毒になつて来たなどという者もあつた。新しく乗込んで来た男と娘は、熱心にその話に耳をかたむけているらしかったが、やがて男は小声でわたしに訊きいた。

「蛇がどうしたのですか。」

ここでこの男と娘に就いて、すこしく説明して置く必要がある。男は十九か二十歳はたちぐらいで、高等学校の制帽と制服をつけていた。娘は十五、六の女学生らしい風俗で蝦えび色の袴はかまを穿はいていた。その服装と持ち物とを見れば、彼らは暑中休暇で郷里に帰省きやうだいしていて、さらに再び上京するものであることは一と目に覺さられた。かれらが兄きやうだい妹まいであるらしいことも、その顔立ちをみて直ぐに知られたが、取分けて妹は色の白い、眉まゆの優しい、齒並はなみの揃つた美しい娘であるのが私の注意をひいた。

問われるままに、わたしはかの青い蛇の一件を物語ると、兄も妹も顔の色を動かした。

「そうして、その蛇はどうしました。」

「駅へ着く前に窓から捨てました。」

「駅へ着く前……。よほど前でしたか。」と、兄はかさねて訊いた。

「いや、捨てるのと直ぐに駅へ着きました。」

兄は黙って聴いていた。妹の顔色はいよいよ蒼ざめた。若い娘の前で蛇の話などを詳しくしゃべって聞かせたのは、わたしの不注意であつたかも知れないと気がついて、もういい加減にその話を打ち切ろうとすると、兄は執拗く又訊いた。

「その蛇は青いのでしたね。よほど大きいのでしたか。」

「いや、一尺ぐらいでしたらう。」と、わたしは軽く答えた。そうして、その話を避けるように窓の外へ眼をそらした。

わたしが傍^{わき}を向いていたのは、せいぜい二分か三分に過ぎなかったが、そのあいだ兄と妹はどう相談をしたのか、網棚の上にあげてある行李^{こくり}をおろし始めた。なんだか下車の支度でもするらしいので、私はすこしく不思議に思っていると、やがて列車は次の駅に着いた。その前から二人は席を起つて、停車を待ちかねているような風であつたが、停まると

直ぐに兄はわたしに会釈えしやくした。

「どうも失礼をいたしました。」

妹も無言で会釈して、二人は忙がしそうに下車した。その余りに慌てたような態度が又もやわたしの注意をひいて、窓からかれらの行くえを見送ると、ここは小さい駅であるから乗降りの客も少なく、兄きょうだい妹がほとんど跣足で改札口を出てゆく後ろ姿がはっきりと見えた。勿論、なにかの都合で途中下車をしないとも限らないのであるが、くどくも言う通り、余りにもあわただしい二人の様子が何か子細ありげにも思われた。そうして、それがあの蛇の話に何かの關係があるのではないかとも疑われた。それは私ばかりでなく他の乗客にも怪しまれたと見えて、東京の商人は笑いながら私に言った。

「あの娘さんはよっぽど蛇が嫌いらしい。あなたに蛇の話を聞かされて、真つ蒼になつてしまいましたね。なんでも兄さんを無理に勧めて、急に降りることになつたようです。」

「それで降りたんでしようか。」

「この箱には蛇が乗つていたというので、急に忌いやになつたのでしよう。嫌いな人はそんなものですよ。」

それならば他の車室へ引移れば済むことで、わざわざ下車するにも及ぶまいと思ひなが

ら、わたしは再び車外へ眼をやると、若い兄妹の姿はもうそこらに見えないで、駅の前
大きい桜に あぶらぜみ 油 蟬 が暑そうに啼き続けているばかりであった。

列車がまた進行をはじめると、さっきの車掌がふたたび廻つて来た。かの商人は話し好
きとみえて車掌の顔をみると直ぐに又話しかけた。

「どうもさつきは驚かされたね、汽車のなかでによるによる這い出されちゃ堪まらないよ
。」

「まったく困ります。しかし考えると、少し不思議でもありますよ。」

「なにが不思議で……。」

残暑の強い時節であるのと、帰省の学生らが再び上京するには小一週間ほど早いので、
列車のなかはさのみ混雑していなかった。現にあの兄妹の起ったあとは空席になっていた
ので、車掌はそこへ腰をおろした。

「なにが不思議といつて……。わたしは おとし 一昨年の春からこの鉄道にあしかけ三年勤めてい
ますがね、毎年夏になると、蛇の騒ぎが二、三回、多いときには四、五回もあるのです。」
「ここらには蛇が多いのかね。」と、商人は訊いた。

「特に多いという話も聞かないのですが……。」と、車掌はすこし首をかしげながら言っ

た。「それが又不思議で……。その蛇の騒ぎはいつでも広島とFの駅とのあいだに起るのです。そうして、きょうと同じように、乗客自身はなんにも気がつかないでいると、蛇がいつの間にかその荷物の中に這入り込んでいるのです。ことしももうこれで五回目になるでしょう。わたしも職務ですから、一応はあの人を詮議しましたけれど、肚はらの中では又かと思っていました。」

「ふうむ。そりやあ不思議だ、まったく不思議だ。」と、商人は仰ぎょうさん山らしく顔をしかめて、その首を大きく振った。「そうすると、何か子細がありそうだな。広島とFの町とのあいだに限っているのは不思議だ。」

「まだ不思議なことは、それがいつでも上り列車に限っているのです。」

「いよいよ不思議だ。ねえ、そうじゃありませんか。」と、商人はわたしを見返った。

「不思議ですね。上り列車に限るとは……。」と、私もうなずいた。

「いや、まだあります。」と、車掌も調子に乗ったように説明した。「その蛇を持って来る人は、いつでもKの駅から乗込むのです。そうして、Fの駅へ近づいた時に発見されるのです。きょうもきつとそうだろうと思いが、その乗車券をあらためて見ると、果たしてKの駅から乗った人でした。」

商人とわたしとは黙って顔を見合せていると、車掌は又言った。

「きょうのように偶然の事故から発見されることもありませんが、多くのなかには発見されないで済むこともあるだろうと思われます。そうすると、たくさんの蛇がKの町から来る乗客に付きまとい、Fの町へ乗込むことになるわけです。」

「そう、そう。」と、商人はやや気味悪そうにうなずいた。「どうも判らない。なにか因縁があるのかな。」

「どうも変ですよ。」と、車掌も子細ありげに言った。「なにしろ蛇の騒ぎを起すのは、Kの町から来る人に限るのですからな。」

「その蛇はどこへ行くつもりかな。」と、商人はかんがえた。

「そりや判りませんね。」

「判らないのが本当だろうが、なにかFの町の方へ行つて祟^{たた}るつもりらしい。」と、商人は何もかも見透しているように言った。「きつとFの町の誰かに恨みがあつて、ぞろぞろ繋^{つな}がつて乗込むに相違ない。怪談、怪談、どうも気味がよくないな。」

さっきの兄妹の顔がわたしの眼に浮かんだ。

商人もそれに気がついたように又言い出した。

「そうすると、あの兄妹が蛇の話を聞いて顔の色を変えたのが少しおかしいぞ、あの二人はFの駅から乗ったんだから……。」

「どんな人たちでした。」と、車掌は訊いた。

商人は二人の人相や風俗を説明して、彼らが途中から俄かに下車したことを話すと、車掌も耳をすまして聴いていたが、さてそれが何者であるかを覚^{さと}り得ないらしく、やがて私たちに会釈して立去った。

二

予定の通りに、わたしは岡山で弁当を買って食った。そうして、その日の夕方に神戸に着いた。そこで社用を済ませて、その晩は一泊して、あくる日の午前の汽車に乗込んで広島まで引返した。商売上のことはここで説明する必要もないが、私はその商売の都合で再び神戸へ行かなければならない事になったので、広島に暑苦しい一夜をすごして、その明くる日の午前には又もや神戸行きの列車に乗込んだ。残暑のきびしい折柄、同じところを往ったり来たりするのは可なり難儀であつたが、どうも致し方がない。しかもこの上

り列車に乗ることに就いて、わたしは一種の興味を持たないでもなかった。

それは今度の列車にも、Kの町から乗り込む人があつて、その人が又もや蛇を伴っているかも知れないということであつたが、その期待はまったく外れてしまった。Kの町から

乗った人もあり、Fの町で降りた人もあつたが、いずれも平穩無事で、なんの人騒がせをも仕出^{しで}来^かさずに終つたので、わたしはひそかに失望しながら車外をぼんやり眺めていると、

Fの駅の改札口をぬけて、十四、五人の乗客がつづいて出て来た。そのなかにあの学生のきようだい

兄^{きようだい}妹^いの顔を見いだした時に、わたしは俄かに胸のおどるのをおぼえた。そうして、か

れらがきようも私の車室へ乗込むことを願っていると、二人はあたかも絲^{いと}にひかれるように、わたしの車室へ入り込んで来たので、占めたと思つて見ていると、あいにく車内には空席が多かつたので、かれらはわたしよりも遠く離れた隅の方の席に腰をおろした。

それでも二人はわたしを見付けて、遠方から黙礼した。わたしも黙礼した。さりとて馴^なれなれしく其の近所へ席を移すわけにも行かないので、わたしは残念ながら遠目に眺めているほかはなかつた。

かれらが今日もここから乗込んだのを見ると、おとといは次の駅でいったん下車して、さらに下り列車に乗りかえてFの町へ引つ返し、きのう一日は自宅にとどまつて、きよう

の午前に再び出て来たものらしく思われた。かれらの服装も行李もすべて先日の通りであった。私はなお注意して窺うと、兄も妹もその顔色が先日よりも更によくはない。殊に妹の顔は著るしく蒼ざめているように見えた。

かれらはKの町から続々乗込んで来る蛇の群れに悩まされているのではないかなどと、私はいろいろの空想をめぐらしながらひそかにその行動を監視していたが、かれらの上に怪しいような点も見いだされなかった。妹は黙って俯向^{うつむ}いていた。兄も黙って車外をながめていた。

岡山でわたしは例のごとくに弁当を買った。かの兄妹も買った。その以外に、かれらの行動について私の記憶に残っているようなことはなかった。私はきょうも神戸で降りた。兄妹も下車した。かれらはおそらく新橋行きの列車に乗換えたのであろう。その後のことは勿論わたしに判ろう筈もなかった。

その翌年には日露戦争が始まって、わたしの勤めている門司支店は非常に忙がしかった。それが済むと、すばらしい好景気の時代が来た。明治四十年の四月、わたしは社用を帯びて上京して、約三カ月ばかりは東京の本社の方に詰めていることになった。

なにしろ久し振りで東京へ帰って来たのである。時は四月の花盛りで、上野には内国勸業博覧会が開かれている。地方からも見物の団体が続々上京する。天下の春はほとんど東京にあつまっているかと思われるような賑わいのなかに、わたしも愉快な日を送っていた。しかし遊んでばかりはいられない。わたしは毎日一度はかならず出社する以外に、東京にある親戚や先輩や友人をたずねて、平素の無沙汰ほどこをしなければならないので、働くと遊ぶの暇をみて諸方へ顔出しをすることも怠らなかつた。そのあいだに、わたしは江波先生をしばしば訪ねた。

先生は法学博士で、わたしが大学に在学中はいろいろのお世話になったことがある。その住宅は本郷の根津権現に近いところに在つて、門を掩おおうている桜の大樹が昔ながらに白く咲き乱れているのも嬉しかった。第一回の訪問は四月の第一日曜日であつたと記憶しているが、先生も奥さんもみな壮健で、二階の十畳の応接室へ通された。そこは日本の畳の上に絨じゅうたん緞ぬいを敷いて、椅子やテーブルを列ならべてあるのであつた。

やがて若い女が茶を運んで来た。奥さんが自身に菓子鉢を持って来た。若い女はすぐに立去つたが、奥さんは先生とわたしに茶をついでくれた。

「あの方はお家のお嬢さんじゃありませんな。」と、わたしは訊いた。

「娘じゃありません。」と、奥さんは笑いながら答えた。「娘は少し風邪を引いて二、三日前から寝ています。あの人は多代子さんといって、よそから預かっているのです。」

「多代子さん……。もしやあの方は広島県の人じゃありませんか。Fの町の……。」

「ええ。」と、奥さんは先生と顔を見合せた。「よく御存じですね。」

「じゃあ、やつぱりそうでしたか。どうも見たことがあるように思っていました。」

「どこかでお逢いなすったことがあるのですか。」と、奥さんは再び笑いながら訊いた。

「はあ。山陽線の汽車のなかで……。そのときは兄さんらしい人と一緒にでした。」

わたしは先年のことを簡単に話した。しかしどんな当り障りがあるかも知れないと思ったので、蛇の一件だけは遠慮してなんにも言わなかった。

「むむ、多代子さんは兄さんと一緒に相違あるまいが……。」「と、先生は重い口で私にかかった。「君は誰と一緒に乗っていたかな。多代子さんに賄賂わいろでも使って置かないと、飛んでもないことを素っ破抜かれるぜ。」

奥さんも私も笑い出した。

多代子はFの町の近在の三好という豪農のむすめで、兄の透とおるという青年と一緒に上京して、ある女学校に通っている。先生は三好の家と特別の関係があるわけでもないが、ある

知人から頼まれて、多代子だけを預かつて監督している。先生の家にも多代子と同年の娘があつて、おなじ女学校に通つていたので、かたがた旁々その世話をしてやることになつたのである。兄の透はこの近所の植木屋の座敷を借りて、そこから通学している。これだけのことは奥さんの説明によつて会得するえとくことが出来た。多代子はことし十九で、容貌きりようは見る通りに美しく、性質も温順で、学業の成績もよいので、まことに世話甲斐があると先生夫婦も楽しんでゐるらしい口ぶりであつた。

奥さんが降りて行つた後に、先生とわたしは差向いで二時間ほど話した。先生は午ひるめ飯しを食つてゆけと言われたが、わたしは他に廻るところがあるので、又お邪魔に出ますと言つて二階を降りると、奥さんは多代子を連れて出て来た。

「もうお帰りですか。では、ここで改めて多代子さんを御紹介しましょう。」

彼女は果たしてわたしの顔を記憶していたかどうか知らないが、ともかくも型のごとくに挨拶あいさつして別れた。先年はまだ少女といつてもよかつた多代子が、今は年ごろの娘に成長して、さらにその美を増したように見えた。その白い艶あでやかな顔には、先年見たような暗い蒼ざめた色を染め出していなかった。春風の吹く往来へ出て、わたしもなんだか一種の愉快を感じながら歩いた。

二回目に先生を訪問したのは四月の末で、その日は平日であつたので通学中の多代子さんは見えなかった。先生のお嬢さんも病気が全快して一緒に学校へ出て行つたとの事であつた。

第三回の訪問は五月のなかばの日曜日で、わたしは午後七時ごろに上野行きの電車を降りると、博覧会は夜間開場をおこなっているので、広小路付近はイルミネーションや花瓦^{はな}スで昼のように明るかつた。そこらは自由に往来が出来ないように混雑していた。

わたしはその賑わいを後ろにして池の端^{いはた}から根津の方角へ急いだ。その頃はまだ動坂^{どうざか}行きの電車が開通していなかつたので、根津の通りも暗い寂しい町であつた。路ばたには広い空地などもあつて、家々のまばらな灯のかげは本郷台の裾に低く沈んでいた。わずかの距離で、上野と此処^{ここ}とはこんなにも違うものかと思ひながら、わたしは宵闇の路をたどつてゆくと、やがて団子坂の下へ曲ろうとする路ばたの暗いなかで、突然にきやつという女の悲鳴が聞えたので、わたしは持つてゐるステッキを把^とり直して、その声をしるべに駈け出すと、出逢いがしらに駈けて来る一人の男があつた。あぶなく突き当ろうとするのを摺りぬけて、彼はどこへか姿を隠してしまつた。月はないが、星は明るい。少しく距^{はな}れたところには煙草屋の軒ランプがぼんやりと点^{とも}つてゐる。その光りをたよりに透かしてみる

と、草原つづきの空地を横にした路ばたに、二人の女の影が見いだされた。

「どうかなすったんですか。」と、わたしは声をかけたが、女たちはすぐに答えなかった。かれらの悲鳴を聞いて駆け付けたらしい、わたしに続いて巡査の角燈かくとうの光りがここへ近寄った。女は先生のお嬢さんと多代子の二人で、多代子はぐったりと倒れかかるのを、お嬢さんがしっかりと抱えているのである。それを見てわたしは又驚いた。

巡査の取調べに対して、お嬢さんは答えた。二人は根津の通りへ買物に出て、帰り路にここまで来かかると、空地の暗いなかから一人の男があらわれて、多代子の頸くびへ何かを投げつけたというのである。巡査は更に訊いた。

「なにを投げ付けたのですか。」

「蛇です。」と、多代子は低い声で答えた。

蛇と聞いて、巡査もお嬢さんも顔をしかめたが、わたしは更に強い衝動を感じた。多代子と蛇と——先年の汽車中の光景が忽たちまちわたしの眼の先に浮かび出したのである。巡査は角燈を照らしてあたりを見廻すと、草のなかに果たして一匹の青い蛇が白っぽい腹を出して横たわっていた。

「むむ、蛇だ。」

巡査は子細にあらためて、また俄かに笑い出した。

「はは、これは玩具だ。おもちゃ 拵え物だ。こしら」

「ほんとうの蛇じゃありませんか。」

のぞき込む私の眼の前へ、巡査は笑いながらかの蛇をとって突き出した。なるほど精巧には出来てはいるが、それは確かに拵え物の青大将であるので、わたしも思わず笑い出した。

「はは、玩具だ。多代子さん、驚くことはありません。こりや玩具の蛇ですよ。」

このごろは博覧会の夜間開場が始まったので、夜ふけて帰る女たちを暗いところに待ち受けて、悪いたずらをする奴がしばしばある。これもそのたぐいであろうと巡査は言った。そう判つてみれば、さしたる問題でもないの、わたし達は挨拶して巡査に別れた。わたしはどうせ先生の家へゆく途中であるから、女ふたりを送りながら一緒に付いて行つたが、先生の門をくぐるまでの間、多代子は一言も口をきかなかった。

「近所ではあり、まだ宵だからと油断して、若い者ばかりを出してやったのが間違いでした。」

と、奥さんは悔んでいた。

たとい玩具にしろ、何者かのいたずらにしろ、二人ならんでいる女のうちに、多代子を目ざして蛇を投げ付けたのは、故意か偶然かと私はかんがえた。二人のうちで、多代子の方が一段美しいためであつたかとも考えられた。その形のみえない暗いなかで、多代子が十分にそれを蛇と直覚したのは少しく変だとも言えないことはない。しかもその晩は何事もなく、わたしは先生と一時間あまり話して帰った。

第四回の訪問は六月はじめの午前で、先生の門をくぐると、大きい桜の葉から毛虫が二、三匹落ちて来た。例のごとく二階へ通されたが、奥さんの話によると、お嬢さんは学校へ出て行つたが、多代子は病気で寝ている、それに就いて、先生は警察へ行つてゐるとの事であつた。

「なにしに警察へ行かれたのですか。」

「こういうわけなのです。」と、奥さんは顔を曇らせながら説明した。「御存じの通り、先月なかばに多代子さんと娘が根津へ買物に出て、その帰りに多代子さんが蛇をほうり付けられたことがあるでしょう。それは玩具おもちゃの蛇でしたが、今度はほんとうの蛇をほうり込んだ奴があるのです。先月の末に、下の八畳で多代子さんと娘が机にむかつて勉強していると、肱ひじかけ窓から一匹の青大将を多代子さんの顔へ……きやつという騒ぎのうちに、

相手は逃げてしまったのですが、なんでも横手の生垣いけがきを破って忍び込んだらしいのです。娘の話では、そのうしろ姿が若い学生らしかったということです。まだそれだけなら好いのですけれど、その後にはたびたび多代子さんのところへ脅迫状をよこして、午後八時ごろまでに根津権現の表門前まで来てくれ、さもなければ、いつまでも蛇をもってお前を苦しめるからそう思え、というようなことが書いてあるのです。一度や二度は打っちゃって置きましたけれど余りたびたび重なるので、一応は警察へ届けて置く方がよからうといって、良人うちはさつきから警察へ行っているのです。いずれ不良青年の仕業しわざでしょうけれど、困ってしまいますよ。」

「けしからんことですな。それで多代子さんは寝ているんですか。」

「なんだか気分が悪いといって、二、三日前から学校を休んでいるのです。」

勿論、不良青年の仕業であろうが、その青年がもしや広島県のKの町の人間ではないかと、わたしは考えた。そうして、思わず口をすべらせた。

「多代子さんには蛇が祟たたっているようすな。」

「なぜです。」

奥さんにだんだん問い詰められて、私はとうとうあの汽車の一件を打明けると、奥さん

はいよいよ顔の色を暗くした。

「まあ、そんな事があつたのですか。なにかの心得になるかも知れませんか、良人^{うち}にも一通り話して置いて下さいよ。」

「いや、先生に話すと笑われます。」

そこへあたかも先生が帰つて来て、その不良青年については警察でも、たいてい心当りがあるとの事であつた。奥さんが頻^{しき}りに催促するので、しよせん無駄だとは思ひながら、わたしは再び先生の前で汽車中の一件を報告すると、果たして先生はただ冷やかに笑つていた。

「それは僕に話してもしようがない。小説家のところへでも行つて話して聞かせる方が、よさそうだね。」

奥さんもわたしも、重ねていう術^{すべ}がなかった。

三

それから五、六日経つと、多代子さんにいたずらをした不良青年が捕われたという新聞

記事が見えたので、わたしはその晩すぐに先生の家を訪問すると、先生は誰かの洋行送別会に出席したといって留守であった。奥さんに会って、わたしは新聞記事の詳細を聞いたですと、奥さんはまず第一にこんなことを言い出した。

「どうもわたしは驚きましたよ。多代子さんを付け狙った不良青年は、やっぱり広島県のKの町の生れだったそうです。」

「そうですか。」と、わたしも眼をかがやかした。「じゃあ、多代子さんの身許みもとを知っていたんでしょうか。」

「それは知らないのだそうですがね。そんな事を常習的にやっているのです、警察からも眼をつけられている不良青年で、多代子さんがFの町の人だか、三好という家の娘だか、そんなことはなんにも知らないで、ただその容貌きりようの好いのを見て付け狙ったというだけの事らしいのです。しかし、それがちょうどにKの町の人間だというのが不思議じゃありませんか。」と、奥さんは眉をよせた。

「不思議ですね。」と、私もなんだか不思議のように思われてならなかった。

「ねえ、そうでしょう。」と、奥さんは重ねて言った。「良人うちはあんな人ですから、何を言っても取合ってはくれませんけれど、わたしはなんだか気になるので、多代子さんにい

ろいろ訊いてみましたが、本人はなんにも心当りがないと言うのです。けれども、あなたのお話によると、多代子さんの兄妹は汽車のなかで蛇の話を聞いて、途中で急に下車して家に引つ返したらしいというじやありませんか。してみると、やっぱり何か思い当ることがあるに相違ないと思われるのですが……。」

当人が隠しているものを無理に詮議するのも好くないから、まず其のままにして置いたが、その以来、自分の家に多代子さんを預かっているのが何だか不安になって来たと、奥さんは小声で話した。奥さんの鑑定通り、多代子は何かの秘密を知っていながら、あくまでも知らないと言い張っているらしく思われたが、さてそれがどんな秘密であるかは、所^{よせん}詮われわれの想像の及ばないことであつた。

「多代子さんの兄さんが来たときに訊いてみようかとも思うのですが、それもなんだか変ですからねえ。」と、奥さんは考えていた。

「それはお止^よしになつた方がいいでしょう。」と、わたしは注意した。「そのうちには自然に判ることがあるかも知れませんか。」

「そうですねえ。多代子さんと違つて、透さんにうっかりそんなことを訊いて、それが良^う人の耳にでもはいると、わたしが又叱られますから。」

多代子の話はそれで打切りになった。先生の帰りは遅くなりそうだということで、わたしは奥さんと三十分ほど話して帰った。社の用件も片付いて、わたしも七月の初めには再び門司の支店へ帰ることになったので、先生のところへ暇乞いにゆくと、あいにくに今夜も先生は留守であつた。梅雨のまだ明け切らない曇つた宵である。こんな晩に先生はどこへ行かれたかと訊ねると、奥さんは小声で答えた。

「桐沢さんのところへ呼ばれて行つたのです。」

「桐沢さん……。」

「あなたも御存じでしょう。」

「お名前だけは承知しています。」と、わたしは言った。桐沢氏は知名の実業家で、その次男は大学の文科に籍を置いている。それが将来は先生のお嬢さんの婿になるという内約のあるらしいことは、わたしも薄々知っていた。そういう事情から、桐沢氏は多代子のよいうな若い娘を自分の家にあずかつて置くのは、先生夫婦の思惑もいかがという遠慮から、わざと自宅に寄宿させることを避けて、反対に彼女を先生のところへ預けることになったらしい。それは私も薄々察していたが、その桐沢という人にも、又その次男という人にも、これまで懸け違つて一度も出逢つたことはなかったのである。

そういう訳であるから、外出嫌いの先生が今夜のような晩に桐沢氏を訪問したのも、別に怪しむにも足りないものであった。しかし、それを話す奥さんの顔色は余り晴れやかでなかった。

「なんだか変なことですね。」

「どういう事です。何か事件が^{しゅったい}出来たんですか。」

「ええ。」と、奥さんはうなずいた。「また例の多代子さんのことで……。」

「また蛇でもぶつけられたんですか。」

「いいえ、そうじゃないのですが……。学校もやがて夏休みになるので、兄さんの透さんも帰省する。多代子さんも毎年一緒に帰るのですが、この夏に限って帰らないと言い出して、熱海か房州か、どこかの海岸へ行きたいと言うのです。郷里でも両親が待っているから、まあ帰れと兄さんが勧めるのですけれど、本人はどうしても忌^{いや}だと言うのです。」

「なぜでしょう。」

「それはよく判りません。」と、奥さんは言った。「いくら本人が行きたいと言ったところで、若い娘たちをむやみに海岸の避暑地なぞへ出してやられるものではありません。誰か相当の者が付いて行かなければならないでしょう。兄さんでも一緒に行ってくれば格

別ですが、兄さんはどうしても帰省するという。妹は忌だという。といって、わたし達が付いて行くというわけにも行かず、まことに困ってしまうので、良人うちはその相談ながらに、今夜桐沢さんのところへ出かけて行つたのですが、どういうことに決まりますかねえ。」

多代子が帰省を嫌うのは、山陽線の列車の中で又もや何かの蛇さわぎに出逢うのを恐れているのではないかと、私はふと思い浮かんだので、それを奥さんにささやくと、奥さんも同感であるらしかった。

「実はわたしも、もしやと思つて、それとなく多代子さんに訊いて見たのですが、本人は一向にそんなことを言わないのです。もつとも隠しているのかも知れませんが……。あなたもそういうお考えならば、もう一度、良人に話してみましようか。」

「およしなさい。」と、わたしは遮さへぎつた。「そんなことを言つても駄目ですよ。先生はとも受付ける筈はありませんよ。現にこのあいだもあの通りでしたから。」

「それもそうです……。」と、奥さんも思い煩うように見えた。「なにしろ本人がどうしても忌だというものを、無理に帰してやるわけにも行きますまいからねえ。」

「多代子さんはどうしているんです。」

「やはり下の八畳に……。娘と一緒に机ならを列べているのです。」

「別に変った様子も見えませんか。」

「ほかには別に変ったことも……。」

奥さんがこう言いかけた時に、階子^{はしご}をあがって来る足音がひびいた。と思う間もなく、襖^{ふすま}の外から若い男の声がかきこえた。

「奥さん、御来客中をまことに失礼ですが……。」

「あ、透さん。いつお出でなすつたの。」と、奥さんは見返った。「構いません。おはいりなさい。」

襖をあけて、電燈の下に蒼白い顔をあらわしたのは、学生風の青年であつた。私はその青年をひと目見て、彼が多代子の兄の三好透であることを直ぐに覺つたが、相手の方ではもう私を見忘れているらしかった。殊に今夜の彼はひどく亢奮^{こうふん}しているらしく、私に向つてはなんの会釈もせずに、突つ立つたまま奥さんに話しかけた。

「奥さん。妹はあしたの朝の汽車で連れて帰ります。」

「あしたの朝……。多代子さんも承知したのですか。」

「承知しても、しないで、直ぐに連れて帰ります。」と、彼は奥さんに食ってかかるように声をとがらせた。

「まあ、おかけなさい。」と、奥さんは逆らわずに椅子をすすめた。「どうしてそんなに急に帰ることになったのです。実はそのことで、良人^{うち}は今夜桐沢さんのところへ行っているのですが……。」

「先生がなんと仰しやつても、桐沢さんがなんとやつても、多代子は連れて帰ります。」と、彼はきっぱりと言いつつ切った。その顔色のいよいよ蒼ざめて来たのが、わたしの注意をひいた。

「それにしても、まあ少しお待ちなさい。もうやがて良人も帰って来ましょうから。」と、奥さんはなだめるように言った。そうして、その話題を転ずるように、改めて私を彼に紹介したが、彼はやはり私を記憶してないらしかった。

わたしは笑いながら言い出した。

「あなたにはお目にかかった事がありますよ。山陽線の汽車の中で……。」

「山陽線の汽車の中で……。」

「蛇の騒ぎがあつた時に……。」

こう言つて、わたしはその顔色を窺うと、彼も睨^{にら}むように私の顔をじつと見つめていたが、やがて漸く思い出したように、少しくその顔色をやわらげた。

「いや判りました。その節はどうも失礼をいたしました。あなたもこの先生の家へお出入りをなさる方とはちつとも知りませんでした。いや、今夜も少し気が急^せいていましたので、どうも失礼をいたしました。」

彼は繰返して失礼を謝していた。わたしも若いが、彼はさらに若い。一時の亢奮から、なんとなく穏やかならぬ気色^{けしき}をみせているが、しよせんは愛すべき一個の青年であることを、私は認めた。彼もわたしには遠慮したのか、あるいはだんだんに神経も鎮まつて来たのか、やや落着いたような態度で椅子に腰をおろした。

奥さんが茶を入れかえに立つた後で、私はしずかに彼に訊いた。

「唯今伺ったところでは、妹さんを連れてお帰りになるのですか。」

「まあ、そうです。」と、彼はハンカチーフで額の汗を軽く拭きながら答えた。「どうも困りました。」

彼はその以上に何事をも語らないので、なじみの薄いわたしが更に踏み込んで其の秘密を探り出すわけにも行かなかった。それと同時に、私がここに長居することは、彼と奥さんとの用談を妨げる虞^{おそ}れがあるらしいので、彼ひとりをそこに残して、わたしは二階を降りて来ると、階段の下で奥さんに逢った。

「今晚はこれでお暇いとまします。」

「そうですか。」と、奥さんは気の毒そうな顔をしていた。

「いえ、まだ二、三日はこつちに居りますから、また出直して伺います。」

「では、是非もう一度……。」

奥さんに送られて、わたしが玄関で靴を穿いているときにお嬢さんも出て来たが、多代子は姿を見せなかった。門かどを出ると、細かい雨が又しとしと降っていた。前にもいう通り、そのころの根津権現付近は静かであった。殊に梅雨の暗い夜にはほとんど人通りも絶えている位で、権現の池のあたりで蛙の鳴く声がさびしく聞えた。

その暗い寂しいなかを五、六間ばかり歩き出すと、塀の蔭から一人の男が現われて私のそばへ近寄つて来た。

「あなたは今、江波さんの家から出て来ましたね。」

暗いので、その人相も風体も判らなかつたが、今頃こんな所に忍んでいるのは例の不良青年ではないかという懸念があるので、わたしも油断せずに答えた。

「そうです。なにか御用ですか。」

「もう少し前に、若い男が一人はいつて行きましたらう。」

それは透のことであろうと私は察したので、いかにも其の通りだと答えると、男はわたしを路ばたの或る家の軒のきランプの下へ連れて行って、一枚の名刺をとり出して見せた。彼は××警察署の刑事巡査であつた。

「あの若い男は三好透という学生でしょう。」と、刑事は小声で言った。

「そうです。」

「江波博士とどういう関係があるのでしょうか。」

相手が警察の人間であるので、わたしは自分の知っているだけの事を正直に話して聞かせると、刑事は少しく考えていた。

「そうすると、透という学生は三好多代子の実の兄ですね。それはおかしい。実はあの学生は不良性を帯びているので、今夜も尾行びこうして来たのですが……。このあいだ江波さんの窓から蛇を投込んだのは、どうもあの男の仕業らしいのです……。」

「それは違います。」と、わたしは思わず声をあげた。「あの時には多代子さんの顔へ蛇を投げ付けたというじやありませんか。いくら不良性を帯びているといっても、現在の妹に対してそんな悪いたずら戯をする筈はないでしょう。現にその犯人は、もう警察へ挙げられたと聞いていますが……。」

「いや、それがね。」と、刑事はしずかに言った。「さきごろ、警察へ挙げられた犯人――それは佐倉という者で、この五月に根津の往来で多代子さんに玩具おもちゃの蛇を投げたことがある。それだけは本人も自白したのですが、江波さんの窓から生きた蛇を投げ込んだ者は確かに判っていないのです。前の一件があるので、警察の方でも一時は彼の仕業と認定してしまったのですが、本人はどうしても後の一件を自白あしない。だんだん調べてみると、まったく彼の仕業ではなく、そのほかにも同じような悪いたずら戯者があるらしいのです。その証拠には、佐倉の拘留中にも往來の婦人にむかつて、やはり蛇を投げ付けた者があるのですから……。」

「それが三好透だと言われるのですね。」

「どうもそうらしいのですが……。しかし、あなたの言われた通り、他人は格別、実の妹にもそんな悪戯をするのは……。ちっとおかしいように思われますね。」

刑事は考えていた。わたしも考えさせられた。二人は暫く黙って雨のなかに立っていた。

四

そのうちに、私はふと思い出したことがあった。

「しかし、あなたも御承知でしょうが、多代子さんの所へしばしば手紙をよこして、根津権現の門前まで出て来い、さもないければ、いつまでも蛇をもっておまえを苦しめると脅迫した者があるそうです。それもやはり兄の仕業でしょうか。三好透という男は、なんの必要があつて自分の妹をそんなに脅迫するのでしょうか。また、自分の兄の筆蹟ならば、多代子さんは無論見知っているでしょうし、江波博士の家の人たちも、大抵は知っている筈でしょうに……。」

「それはね。」と、刑事は打消した。「三好透がなんのために妹を脅迫するのか判りませんけれど、手紙ぐらいは誰かに代筆を頼んだかも知れませんが。若い友達などの中には、面白半分にそんなことを引き受ける者も随分ありますからね。ただ、肝腎の問題は、三好透がなぜ妹をそんなに脅迫するかということです。あなたにはなんにもお心当りはありませんか。」

わたしにも勿論、心当りはなかった。しかも刑事に対して何かのヒントを与える材料にもなろうかと思つて、わたしは今夜の一条を話した。多代子がこの夏休みに帰省を忌^{いや}がること、兄の透が無理に明朝の列車で連れて帰ろうとすること、それらを逐一聴き終つて刑

事はまた考えていた。

「いや、いろいろありますがどうございました。では、まあ、今夜はこのままにして置いて、もう一度よく考えてみましょう。」

相手が実の妹であると知って、刑事も探偵的興味を殺^そがれたらしく、丁寧^{ていねい}に挨拶して別れて行^わった。透と多代子とが兄妹であることを、警察が今まで知らなかったのは少^うしく迂^う濶^{かつ}ではないかと私は思^{おも}った。

なにしろこうなつた以上は、事件が又どんな風にもつれて来て、先生の迷惑になるようなことが無いとも限らない。わたしは翌朝、会社の方へちよつと顔出しをして、すぐに根津へ廻ろうと思つていたのであるが、会社へ出るとやはり何かの用に捉^とえられて、午前十一時ごろにようよう自由の身になつた。きようは何だか氣が急^せくので、わたしは人車^{くるま}に乗つて根津へ駈^かけつけると、先生はもう学校へ出た留守であつた。それは最初から予想していたので、わたしは二階へ通されて奥さんに会つた。

「ゆうべはあれからどうになりました。」と、わたしはまず訊いた。

「あなたが歸つてから三十分ほどして、良人^{うち}は歸つて来ました。」

「透君はそれまで待つていたんですか。」

「待っていました。」と、奥さんはうなずいた。「それがおかしいのですよ。あなたも御承知の通り、透さんは大変な権幕で、あしたにも多代子さんを引摺って帰るような勢いでしたろう。ところが、良人が帰って来て、桐沢さんとかういう相談を決めて来たから、そう思ったまえ。もし不服ならば、桐沢さんのところへ行って何とでも言いたまえと言つて聞かせると、透さんは急におとなしくなつて、別に苦情らしいことも言わないで、そのまま無事に帰ってしまったのです。」

奥さんが更に説明するところによると、先生は桐沢氏と相談の結果、この夏休みに多代子は帰省するのを見合せて、先生のお嬢さんと一緒に、桐沢氏の鎌倉の別荘へ転地することになったというのである。それはまことに穩^{おんとう}当の解決であるが、あれほどに意氣込んでいた兄の透がそれに対してなんの苦情も言わず、そのまま素直に承諾したのは、わたしにも少しく不思議に思われた。

「そこで、透君はどうするんです。」

「透さんは自分ひとりで帰るそうです。」と、奥さんは言った。「多分けさの汽車に乗つたでしょうよ。」

わたしは奥さんにむかつて、ゆうべの出来事を詳しく話して、多代子に生きた蛇を投げ

付けたのも、多代子に脅迫状を送ったのも、兄の透の仕業であるらしいということを報告すると、奥さんは顔色を暗くした。

「ああ、そうですか。そんな事がないとも言えませんか。」

定めて驚くかと思いのほか、奥さんもその事実をやや是認^{ぜにん}しているらしい口振りであるので、わたしは意外に感じながら、黙ってその顔をながめていると、奥さんは溜息まじりで言い出した。

「こうなればお話をしますがね。あの透さんという人は、人間はまじめですし、勉強家ですし、学校の成績もよし、なんにも申分のない人なのですが、どういうわけか自分の妹をひどく憎^{にく}がるのです。」

「腹ちがいですか。」と、わたしは訊いた。

「いいえ、同じ阿母^{おつか}さんで、ほんとうの兄^{きょうだい}妹^いなのですが……。その癖、ふだんは仲好しで、妹をずいぶん可愛がっているようですが、時々——まあ、発作的とでもいうのでしょうかね、無暗に妹が憎くなつて、別になんという子細もないのに、多代子さんの髪の毛をつかんで引摺り廻したり、打^ぶったり蹴^けったりするのです。自分でもたびたび後悔するのですが、さあ憎くなつたが最後どうしても我慢が出来なくなつて、半分は夢中で乱暴

をするのだそうです。それですから、わたしの家でも注意して、透さんが妹をたずねて来た時には、内々警戒しているくらいです。けれども、まさかに蛇を投込むなどとは思ひも付きませんし、脅迫の手紙の筆蹟もまるで違っていましたから、他人の仕業だと思つて警察へも届けたような訳ですが……。刑事がそう言うくらいでは、やっぱり透さんの仕業だったかも知れません。なにしろ一緒に帰さないで好うござんした。よもやとは思いますが、汽車のなかで不意に乱暴を始められたりしたら、大変ですからね。透さんも初めてのうちはそれほどでもなかったのですが、一年増しに悪い癖が募^つつて来るので、今に多代子さんは兄さんに殺されやしないかと、家の娘などは心配しているのです。」

わたしにも訳が判らなくなつた。わたしは医者でもなし、心理学者でもないから、三好透という青年の奇怪なる精神状態について、なんとも鑑定を下^{くだ}すことは出来なかつた。刑事の話によると、彼は他の婦人に対しても生きた蛇を投げ付けたことがあるらしい。勿論、確かに彼の仕業であるや否やは判らないが、もし果たしてそうであるとすれば、彼はおそろく一種の乱心^{マニア}であろう。もし又、他人に対してはなんらの危害を加えず、単に妹に対してのみ乱暴や脅迫を加えるということであれば、それはやはり普通の乱心として解釈すべきものであるかどうかは、わたしにも見当が付かなかつた。

「そうすると、透君がたびたび脅迫状をよこして、妹を根津権現前へよび出して、一体どうするつもりなんでしょう。」

「さあ。」と、奥さんも考えていた。「多代子さんがうつかり出て行ったら、おそらく何かの言いがかりでもして、往来なかでひどい目にでも逢わせるつもりでしたらう。今もう通り、ふだんは仲好しの兄妹でありながら、時どきに妹が憎くなるというのはどういわけでしょうかねえ。そんなことを言うと言ふと変ですけれど、あの人たちには何かの呪詛^{のろい}が付きまとつてもいるのじゃあないでしょうか。汽車の中のお話を聞いて、わたしには何かだかそう思われてならないのですよ。」

奥さんははじめに言った。何かの呪詛、何かの祟り^{たた}——それを笑うことも出来ないほどに、その当時の私は一種の暗い気分にとざされていた。二人のあいだには怖ろしいような沈黙が暫くつづいた。

「先生はそれをどうお考えになつているのでしょう？」

理性一点張りの先生がそんなことを問題にしないのは判り切っていたが、それでもこの場合、わたしは念のために訊いてみると、奥さんは寂しくほほえんだ。

「良人^{うち}は御存じの通りですから……。」

先生はゆうべ桐沢氏を訪問して、両者のあいだにどんな相談があったのか、わたしはそれを窺い知りたいたと思ったが、それに就いては奥さんも詳しく知らないと言った。先生は元来が寡言^{むくち}の方で、ふだんでも家庭上必要の用件以外には、あまり多く奥さんやお嬢さんと談話をまじえない習慣であるので、今度の問題についても深く語らないであろうことは、わたしにも大抵想像された。

しかし、あれほどに亢奮していた透が、もし不服があるならば桐沢氏に言えという先生の一言のもとに、素直に屈服してしまったのを見ると、かれら兄妹にまつわる何かの秘密を、桐沢氏に知られているので、彼も桐沢氏に対しては頭が上がらない事情があるらしい。奥さんもそんなような意見を洩らしていた。要するに、ここに何かの秘密があつて、それを知っているものは兄の透と妹の多代子と、桐沢氏——と、まだほかにもあるかも知れないが、少なくともこの三人はその秘密を知っているに相違ない。それを問題にすると否とは別として、先生もおそらく知っているであろう。この際、先生の口から聞き出すのが一番近道であるが、前に言つたようなわけで、それは所詮むずかしい。

「それでも無事に済んで、まあ結構でした。」

わたしはさし当りそんなことを言うのほかはなかった。奥さんはうなずいた。

「ええ、そうですよ。鎌倉の別荘ならば、桐沢さんの家の人たちもみんな行くのですから、多代子さんをやって置いて心配はありません。」

奥さんは午飯ひるめしを食って行けと勧めたが、わたしは出発前で忙がしいからと断わって帰った。その後、もう一度たずねたいと思いながら、いろいろの都合で私はとうとう先生に逢わずに東京を去ることになった。勿論、その事情を手紙にかいて先生宛に発送して置いたが、先生には当分逢われないかと思うと、なんだか名残り惜しくもあつた。

わたしは二、三人の友達に送られて新橋駅を出発した。言うまでもなく、その頃はまだ東京駅などはなかったのである。汽車ちゆうには別に語ることもなく、わたしは神戸にいったん下車して、会社の支店に立寄つた。そうして、その翌朝の七時ごろに神戸駅から山陽線に乗換えた。例によつて三等の客車である。

わたしは少しく朝寝をしたので、発車まぎわに駈けつけて、転ころげるように車内へ飛び込むと、乗客はかなりに混雑している。それでも隅の方に空席があるのを見つけて、私はあわててそこに腰をおろすと、隣の乗客はふとその顔をあげて見返つた。その刹那せつなに、わたしはなんとも言えない一種の戦慄せんりつを感じたことを白状しなければならない。その乗客はかの三好透であつた。

奥さんの話によれば、彼はすでに二、三日前に乗車した筈であるのに、何かの都合で遅れたのか、あるいは途中のどこかで下車したのか、いずれにしても、ここで偶然に私と席をならべることになったのである。

「やあ。あなたもお乗りでしたか。」

わたしは少しく吃りながら挨拶すると、彼も笑いながら会釈した。その顔は先夜と打つて変つて頗る晴れやかに見えた。

「急に暑くなりました。」と、彼は馴れなれしく言った。

「そうです。俄か天気で暑くなりました。しかし梅雨もこれで晴れるでしょう。」と、わたしもだんだんに落着いて話し始めた。

彼はやはり二、三日前に東京を去ったのであるが、京都の親戚をたずねるために途中下車したと言つて、京都見物の話などをして聞かせた。元来が温順の性質らしいが、さりとて寡言というでもなく、陰鬱というでもなく、いかにも若々しいような調子で笑いながら話しつづけた。どう見ても、彼は一個の愛すべき青年である。これが一種の乱心であるとか、何かの祟り呪詛を受けている人間であるとかいうような事は、どうしても私には考えられなかった。

「妹さんはどうなさいました。」と、私はなんにも知らない顔で訊いた。

「妹は東京に残つて、鎌倉へ行くことになりました。」と、彼は答えた。

彼は自分のうしろに、刑事の黒い影が付いていた事などを知らないであろう。わたしは更に進んで、かれらと桐沢氏との関係などを問いきわめようと試みたが、それは不成功に終つた。それらの問いに対しては、彼は努めて明快の返答をあたえることを避けているらしく見えた。それが又大いにわたしの獵奇心をそつたのもあるが、何分にも混雜の列車内といい、かつは三時間ばかりの短時間であるので、わたしは結局その目的を達し得なかつた。十時過ぎるころにFの駅に到着して、彼はわたしに別れを告げて去つた。

改札口を出てゆく其のうしろ姿を見送ると、そこには農家の雇人らしい若者が待ち受けていて、彼の革包かばんなどを受取つて、一緒に連れ立つて行つた。勿論、そこらに蛇らしい物の姿などは見いだされなかつた。

のちに思えば、三好透という青年と私とは、これが永久の別れであつた。

それから七年の月日が流れた。そのあいだに、わたしは門司の支店を去つて、さらに大連の支店へ転勤することになった。又そのあいだに私は結婚をする。子供が出来る。社用

が忙がしい。何やかやに取りまぎれて、先生のところへもとかく御無沙汰がちになっていたが、大正三年の十一月、社用で神戸へ戻つて来たので、そのついでに上京して、久しぶりで先生の家の門をくぐった。

先生の家は依然として其の形式を改めなかったが、いつの間にか根津の大通りには電車が開通して、周囲の姿はまったく變つてしまった。それだけに、先生の家の古ぼけているのがいよいよ眼に立つて、むかしなじみの桜は折りからの木枯しに枯葉をふるい落していた。その落葉の雨を払いながら玄関に立つと、見識らない女中が取次ぎに出て来たが、わたしの名を聞いて奥さんが直ぐに出て来た。つづいてお嬢さんも出て来た。

「あら、まあ、おめずらしい。」

なつかしように迎えられて、わたしは例のごとくに二階へ通された。

桐沢氏の次男がお嬢さんの婿になつて、若夫婦のあいだにはすでに男の児が儲けもうられていることを、わたしもかねて知っていた。遅蒔きながら其の御祝儀を述べるやら、御無沙汰のお詫びをするやら、話はなかなか尽きなかったが、なんにしても先生も無事、奥さんも無事、それを実際に確かめることが出来て、わたしもまず安心した。

もう一時間ほど経つと、先生は学校から歸つて来るから、きようは是非待っている」と奥

さんは言う。わたしも勿論そのつもりであるので、そこに居据わっていろいろの話をはじめた。日露戦争後の満洲の噂も出た。そのうちに、奥さんはこんなことを言い出した。

「満洲と台湾とは、まるで土地も気候も違うでしょうけれど、知らない国へ行くと思っても付かないことに出逢うものですね。あなたも御存じでしょう、三好透さん……。あの人は飛んだことになりましたね。」

旧い記憶が俄かにわたしの胸によみがえった。

「三好透……。あの多代子さんの兄さんでしょう。あの人がどうかしたんですか。」

「大学を卒業してから、台湾へ赴任したのですが、去年の六月、急に亡くなりました。」

「マリアにでも罹かかったんですか。」

「いいえ。毒蛇のハブに咬かまれて……。」

「ハブに咬かまれて……。」

わたしは物に魘おそわれたような心持で、奥さんの顔を見つめた。それを一種の不運とか奇き禍かとか言ってしまうばそれ迄であるが、マリアに罹かかったとか、蕃人に狙撃されたとか、水牛に襲われたとかいうのではなくして、彼が毒蛇のために生命いのちを奪うわれたということが、何かの因縁であるように私の魂をおびやかした。青い蛇の旧い記憶が又呼び起された。

「あの人は学生時代に、警察から尾行されていたようでしたが、その方はどうなったんです。」

「蛇をほうつたという一件でしょう。」と、奥さんは言った。「あれは其のまま有耶無耶うやむやになっちゃったようでした。」

「多代子さんばかりでなく、ほかの婦人にも投げ付けたというじゃありませんか。」

「それも透さんの仕業かどうかだか、確かな証拠も挙がらないので、警察でも手を着けることが出来なかったらしいのです。そんなわけで、無事に学校を出たのですけれど、台湾へ行くと直ぐにそんな事になってしまつて……。まるで、台湾へ死に行つたようなものでした。」

世のなかに驚くべき暗合がしばしばあることは、私もよく知っている。三好透が台湾で毒蛇に咬まれたのも、しよせんは偶然の出来事で、一種の暗合であるかも知れない。したがって三好の兄妹と蛇と——それを結び付けて考えるのは、わたしの迷いであるかも知れない。しかもその迷いは私ばかりでなく奥さんの胸にも巢喰くさくっているらしく、奥さんはやがてこう言い出した。

「いつかもお話し申した通り、三好さんの家には何かの呪詛のろいがあるらしく思われてならな

いのです。透さんが台湾へ行つて蛇に殺されるというのは……。学校を出たときに、北海道と台湾とに奉職口があつて、桐沢さんは北海道の方へ行ったら好かろうと勧めたのだそうですが、本人はどうしても台湾へ行くと云つて出かけたので……。もし北海道へ行つていれば、そんな事にもならなかつたのでしように……。どう考えても、なにかの因縁がありそうですね。」

「そう言えば、まったくそうです。」と、わたしも溜息まじりに答えた。「そうして、多代子さんの方はどうしました。」

「多代子さんは無事です。あの人は幸福でしょう。」

奥さんの話によると、多代子は学校を出ると間もなく、桐沢氏の媒^{ばい}妁^{しゃく}で、現在の夫の深見氏方へ縁付いたのである。深見氏は養子で、その実家が広島県のKの町にあることは世間でも知っているのであるから、関係者一同が知らない筈はない。Kの町の蛇がFの町へゆく——その汽車ちゅうの出来事をわたしから聞かされているので、深見氏がKの町の出身であるということに就いて、奥さんは何だか気が進まないように思つたそうであるが、先生は頭からそんなことを問題にしなかつた。三好家にも異存はなかつた。兄の透も反対しなかつた。それでも、奥さんは多代子にむかつて暗^{あん}に注意をあたえた。

「ほかの事とは違いますから、あなたの気に済まないような事があるならば、遠慮なくお言いなさいよ。」

「いいえ、皆さんが好いと思召すなら、わたしも参りたいと思います。」

むしろ本人も気乗りがしているような風で、この縁談は故障なく進行したのであった。結婚後の多代子は幸福であるらしく、精神的にも物質的にも彼女は大いに恵まれているらしいので、奥さんもまず安心してゐるとの事であつた。

その話を聞かされて、わたしの胸も又すこし明るくなった。

「そうすると、何かの呪詛——もし果たして何かの呪詛があつたとすれば、それは透君ひとりとどまつていることで、多代子さんはその傍杖そばづえを食つていたのかも知れませんね。」と、わたしは笑つた。

「そうかも知れません。」と、奥さんもほほえんだ。「それにしても、こんなお話があるのですよ。大正の世のなかに、こんなことを言つたらお笑いになるかも知れませんけど……。」

奥さんは又話し出した。桐沢氏と三好家とは昔からの知合いで、われわれが想像している通り、桐沢氏は三好家の秘密を薄々承知していながら、今日まで誰にも洩らさなかつた

のである。ところが、その次男の次郎君が大学卒業の文学士となり、さらに先生のお嬢さんの婿となり、この江波家の人となるに及んで、その秘密が次郎君の口から奥さんに洩らされた。

次郎君も勿論くわしいことは知らないのであるが、足利時代の遠い昔、三好家はその土地における豪族であつて、なにかの事情からKの土地に住む豪族の森戸家へ夜討ちをかけて、その一家を攻めほろぼした。その後、森戸家の遺族とか残党とかいう者どもが手をかえ、品をかえて、徳川の初期に至るまで約五十年の間、根よく復讐を企てたが、用心のいい三好家では一々それを返り討にして、結局かれらを根絶やしにした。女子供までも亡ぼし尽くした。その以来、一種の怪しい呪詛が三好家に付きまとして、代々の家族が蛇に崇られるというのである。

三好家は関ヶ原の合戦以後、武士をやめ普通の農家となつたが、その祟りはやはり消え去らないので、元禄時代の当主がその地所内に一つの祠ほこらを作つて、呪詛の蛇を祀まつることにした。森戸家のほろびたのは三月二十日であるので、毎月の二十日には供物くもつをささげ、家族一同がその祠に参拝するのを例としていた。そのためか、家にまつわる怪しい呪詛も久しく其の跡を断つたのであるが、明治の後はその迷信も打破だされてしまった。古い祠も

先代の主人のために取毀された。

次郎君の知っているのは、それだけの伝説に過ぎないのであって、まだ其他にも何かの事情があるのかも知れない。いずれにしても、そんな迷信じみた伝説がほとんど何人にも忘れられてしまった明治時代の末期から、前に言ったような種々の不思議（？）が再び現われて来たのである。三好家では勿論かくしているが、しばしば怪しい蛇に見舞われて、何かの迷惑と恐怖とを感ずることがあるらしい。それに対して、桐沢氏も最初は一笑に付していたが、近頃では「どうも不思議だ。」などと首をかしげている事もあるという。したがって、桐沢氏がKの町出身の深見氏のところへ多代子を媒妁することになったのは、故意か偶然か判らない。次郎君は

「親父は何かの罪亡ぼしのつもりかも知れない。」と笑っているそうであるが、さてその深見氏が、かの森戸家の後裔であるかどうか、そんなことは勿論わからない。

以上の物語が終ったところに、先生の人車が門前に停まったらしいので、私たちは急いで出迎えに行った。

それから又、十年の月日が夢のように過ぎた。いわゆる十年ひと昔で、そのあいだには

世間の上にも、一身の上にも、種々の変遷を経て来たが、就^{なかんずく}中わたしに取つて最も悲しい記憶は、大正十一年の秋に江波先生を失つたことであつた。酒を飲まない先生が脳溢血のために、書齋で突然仆^{たお}れたのである。わたしは大連でその電報を受取つたが、何分にも遠く懸け離れているので、単に弔電を発したにとどまつて、その葬儀にもつらなることが出来なかつた。

次はその翌年九月の関東大震災である。わたしの知人でその災厄に罹かつた者も多かつた。東京の本社も焼かれた。その際にもまず氣配^{きづか}われたのは、亡き先生一家の消息であつたが、根津の辺はすべて無事ということを知り、さらに奥さんもお嬢さん夫婦もみな無事という便りを得て、まず安堵^{あんど}の胸を撫^なでおろしたのであつた。

しかし、かの桐沢氏は、その当時あたかも鎌倉の別荘に在つた為に、無残の圧死を遂げたという。わたしは桐沢氏と直接の交渉もなく、従来一面識もないのであるが、次郎君がお嬢さんと結婚しているばかりか、かの三好家の一件についてしばしばその名を聞き慣れているので、その死に対してやはり一種の衝動^{ショック}を感じずにはいられなかつた。

震災の翌年、すなわち大正十三年の夏から、わたしは東京の本社詰めとなつて大連を引揚げて来た。そうして、根津とは余り遠くない本郷台に住居を定めたので、先生の旧宅へ

も毎月一回ぐらいは欠かさずに訪問して、奥さんの昔話の相手になることが出来るようになった。

深見夫人多代子の亡骸^{なきがら}が熱海の海岸に発見されたのは、その翌年の一月である。

前にもいう通り、家庭も極めて円満で、精神的にも物質的にも大いに恵まれていたらしく思われた多代子が、突然にこうした悲劇の女主人公となってしまったのは、実に意外というのほかはない。それに就いて種々の臆説が生み出されるのは無理もなかった。

あるいは発狂ではあるまいかという噂もあつたが、奥さんは私にむかってそれを否定していた。

「多代子さんは一月の十日、自動車に乗って御年始に来てくれました。その時に、この二十日ごろから熱海へ行くという話があつて、今度は長く滞在することになるかも知れないから、当分はお目にかかれまいと言つて帰りました。あとで考えると、よそながら暇乞いに来たらしい。それを思うと、突然の発狂などではなくて、前々から覚悟していたのでしよう。その日はあいにくに、次郎も娘も留守だったものですから、皆さんにお目にかかれないのが残念だなどとも言っていました。」

奥さんは更にこんなことを私に洩らした。

「あなただからお話を申しですけど、多代子さんの死骸が海から引揚げられた時に、警察で検視をすると、左の二の腕に小さい蛇の刺青ほりものがあったので、みんな不思議に思っただけです。立派な実業家の奥さんの腕に刺青があったのですから、誰でも意外に思う筈です。勿論、深見さんの方から警察へ頼んだので、刺青のことなどは一切いっさい発表されませんでしたから、その秘密を知っているのは私たちぐらいでしょう。新聞社でもさすがに気がつかないようでした。」

「多代子さんはいつそんな刺青をしたんでしょう。」と、わたしも意外に思いながら訊いた。

「それは判りません。」と、奥さんは答えた。「わたしの家にいるときに、そんな刺青のなかったのは確かですから、深見さんへ縁付いてからのことに相違ありませんが、それを深見さんが彫らせたのか、自分が内証で彫ったのか、それは一切秘密です。深見さんもそれに就いては何も言いません。なにしろ深見さんはK町の出身で、それと結婚した多代子さんが訳のわからない死に方をして、その腕に蛇の刺青が発見されたというのですから、いろいろのことが又思い出されます。多代子さんの郷里の実家は両親ともに死んでしまつて、総領の息子さんが——台湾で死んだ透さんの兄です。——相続しているのですが、こ

ちからから多代さんの死んだことを電報で知らせてやると、都合があつて上京できないから、万事よろしく頼むという返事をよこしました。」

青空文庫情報

底本：「鷲」光文社文庫、光文社

1990（平成2）年8月20日初版1刷発行

底本の親本：「怪獣―綺堂読物集第七巻」春陽堂

1936（昭和11）年11月

初出：「日曜報知」

1930（昭和5）年10月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5186）を、大振りにつくっています。

※表題は底本では、「深見夫人《ふかみふじん》の死《し》」となっています。

入力：門田裕志、小林繁雄

校正：松永正敏

2006年10月31日作成

2020年1月20日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<https://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

深見夫人の死

岡本綺堂

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>